

Book

最近, おもしろかった本

『貧困の終焉—2025年までに世界を変える—』

ジェフリー・サックス 著 鈴木主税・野中邦子 訳 早川書房 2415円(税込)

「世界で最も重要なエコノミスト」渾身の書 難題に立ち向かう情熱に感銘

本書の原題は『The End of Poverty—How We Can Make It Happen in Our Lifetime』。著者は、私たちが生きているあいだに世界の貧困をなくすることができるという。もちろん、それは可能性に過ぎない。しかし、われわれの世代は、歴史上初めてその可能性を手にした。

この本の著者がターゲットにするのは、「極度の貧困」である。病気と飢え、そして貧困のために、経済開発の梯子の一番下の段にさえ足がかけられない人たちのことだ。その数は世界におよそ10億人。その人たちは、「貧困の罠」——貧困そのものが貧困の原因となっている状態——にはまっていて、自力ではそこから抜け出すことができない。そのうち、毎年800万人以上の人々が、エイズ、結核、マラリアなどにより死んでいる。予防可能でかつ治療法が確立した病気により、毎日2万人以上の人間が死ななければならないという現実には、ばかげているとしかいいようがない。

著者が主張する「貧困の終焉」とは、世界中の全ての人々が、開発の梯子の一段目に足をかけられるようにすることである。それはすでに存在する技術で達成可能だ。そのための

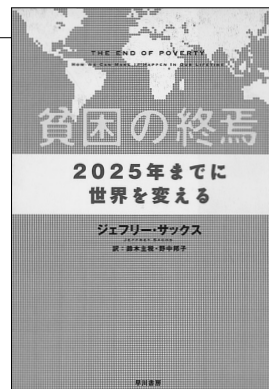
資金は、ドナー諸国*のGNPの0.7%があれば足りる。貧困の原因分析と対策の1つ1つに豊富なデータと実例が提供される。

しかし、その金で本当に貧困をなくせるのか？金をどぶに捨てるようなものではないのか？第16章『まちがった神話、効かない万能薬』では、先進国側のそのような批判に片っ端から反論する。目から鱗、とまでは言わないが、正確な認識なくして判断してはならないと自戒させられる。

貧困撲滅という極めて倫理的かつ政治的なテーマを扱っているが、著者の真摯な知的態度により、その類の書物にありがちな胡散臭さは感じられない。分析の視点は鋭く、知的好奇心が刺激される。著者自身が関与した豊富な実例を挙げており、ドキュメンタリーとして読んでも面白い。何より、情熱を持って難題に立ち向かう著者の不屈の精神に勇気づけられる。

* OECD 開発援助委員会 (DAC: Development Assistance Committee) を構成する22カ国

(会員 城埦 裕行)



Cinema 心に残る映画

『尼僧物語』

1959年／アメリカ／フレッド・ジンネマン監督作品

美しさや表情がより印象深い 粗末な僧衣に身を包んだオードリー

初めてオードリー・ヘプバーンの主演映画を見たのは中学2年生の時、作品は「ローマの休日」だった。

オードリーが演じた気品あふれる「アン王女」に私はすっかり夢中になり、それから暇さえあればオードリー出演映画を見続け、ほぼ全ての作品を制覇した。そのように熱狂的なオードリーファンの私が、もっともおすすめる映画がこの「尼僧物語」である。

この作品の中でのオードリーは、常に粗末な僧衣に身を包んでおり、彼女に対し、おしゃれで華やかなイメージを持っている人には多少の違和感を与えるかもしれない。しかし、質素な衣装がかえって彼女の美しさや表情をより印象深いものにしている。

これは実話をもとにした作品であるが、貧困にあえぐ人々に献身的に接するオードリーの姿は、後にユニセフの親善大使として活動した晩年の彼女の姿とも重なる。



『尼僧物語』
¥3980（税込）
ワーナー・ホーム・ビデオ

舞台は第二次世界大戦直前のベルギー。オードリー演じるシスター・ルークは、非人間的とも思われる教会内の規律と自己の良心の狭間で苦しみながらも、「貧しい人たちのために働きたい」「良い尼僧になりたい」との思いを胸に様々な困難にも耐えて、修道尼として成長していく。

しかし、戦争が勃発し最愛の父をドイツ軍に殺害された彼女は、憎しみから逃れることができず、やがて教会のあり方に疑問を抱き始め、ついには尼僧の地位を捨て、レジスタンスへと身を投じるのである。

彼女のストイックな考え方には、多少不器用さも感じるが、ひたむきな彼女の生き様を見ると、人にはどんな状況でも譲れないものがあると実感すると同時に、自分はその場をうまく立ち回る術だけ身につけてしまったのではないかとの思いに駆られる。華やかさはないが、心に残る映画である。

（会員 田原 真理）